

英国南部旅行(1999)

その8：チチエスター周辺(2)

7月26日(月)

今日はブライトン(Brighton)まで往復することにした。経路はグッドウッドから南下してチチェスター付近でA27で東進し、ウォーシング(Worthing)で海岸通に出て更に東進した。ランシング(Lancing)、ショーハム - バイ - シー(Shoreham-by-sea)、ポーツレード - バイ - シー(Portslade-by-sea)、ホーブ(Hove)を経てブライトン(Brighton)へ行った。みどころはロイヤルパビリオン(Royal Pabilion)である。帰りはA27でアルンデル(Arundel)まで戻りアルンデル城見物後グッドウッドのホテルへ戻った。



A27 はあまり大きくはないが、この地域の幹線であり順調にウォーシングまで進んだ。前にも書いた通り英国の交差点はラウンドアバウトでほとんどの交差点には信号がない。この方が交差交通が円滑に捌けるとのことである。しかし、交通量が多すぎるとやはり信号が必要なようで一部、信号機が設置されていた。ウォーシングでA27から離れ海岸沿いの道路を進んだ。ブライトンまではリゾート地が続いており海水浴客で賑わっていた。日本の様な海の家と言う感じの小屋はなくボックスタイプの個室が連なったようなものがいたるところに設置されていた。途中、小さな飛行場へ迷い込んだりしたが、昼前にはブライトンへ着いた。ロンドンへの通勤が可能なことからベッドタウンと言う側面もあると言う。町の中をぐるっと廻った後、ロイヤルパビリオンの付近で簡単な食事をして口

イタルパピリオンを見学した。ここがイギリスかとは思えない建物であった（前頁写真）。ロイヤルパピリオンの歴史は 1783 年にさかのぼる。時の皇太子（後のジョージ 4 世）がこの地を気に入り、小さな農家を借りたのが初めである。その後、1815 年から 1822 年にイン

ド建築様式を取り入れた現在の離宮を建設されたと言う。ジョージ 4 世に続き、次の国王ウィリアム 4 世（弟）も引き続きここを好んだが次のビクトリア女王はこの町に人が多すぎるとして市へ売り渡してしまった。1948 年から建物の構造上の修復が続けられていると言う。元離宮だけあって内装も調度品も非常にすばらしかった。何故、このようなインド建築様式が取り入れられたかについては案内書には書かれていないが、世界史にはエリザベス女王晩年の 1600 年に東インド会社を設立したとあるので、植民地としてのアジアとの交流と無関係ではないと思われる。見学後、次の訪問地アルンデルへ向かった。A27 を西にかなり戻りアルンデルにあるイングランド第一の公爵ノーフォーク公が代々居城としてきたアルンデル城を訪問した。城は丘の上にあり、麓を流れるアルン川に沿った駐車場に車を止め、歩いて城まで上がった。



上左の写真は城の最上部から眺めた田園地帯の風景である。上右の写真は城の全景である。城の内部には 16 世紀の家具、タペストリー、時計、ポートレートなどが展示されていた。城の隣には小さな教会があり庭がとても美しかった。城の入り口付近に、木製の橋が外敵の侵入を阻止するためにロープで吊上がる仕掛け



があったが兵器の内容は数百年の時の経過で大きく変わったが、古今東西人間の歴史は戦いの歴史であることを実感させられた。夕刻ホテルに帰り、レストラン公爵(Duke's Restaurant)で少しリッチな夕食を摂った。